

平和を信じる：シンプルな行動

(原文は英語)

タニシカ・アグラベ (14 歳)

米国フロリダ州

ウィリアムズ中等教育学校

私は、これまでの人生の中で、平和は消滅してしまったという悲観的な人たちに数多く出会ってきました。実際ある程度、それが正しかったとしても、私たちが住む世界を落胆させるような言葉をたくさん聞かされてきました。「誰も信じるな。信じたら、騙される」「この世界には、助けてくれる人なんていない」。8 年前、ナイーブな子どもだった私は、文字通り、この生活の向こう側に横たわる矛盾に気が付いていなかったのだと思います。しかし、私は今、信頼の側について、世界の希望と平和のために努力しています。時には、全く前例の無い不運な状況の中で、おかしい人たちが人々の人生に付け入り、影響を及ぼすこともありますが、私は平和が持つ無限の空白、つまり優しさにあふれた社会こそが本来の姿であると認識しています。

この言葉が頭をよぎる時、私は、2015 年にニューデリーで列車に乗っていた時に起こった、人生を一変させるような出来事を思い出します。このよく知られた駅の喧騒の中で、線路に停車していた列車の軋む音が突然フラッシュバックしました。人々は最初に列車に乗ろうと走っていたり、愛する人たちが親類を抱きしめようと駆け寄っていたり、構内アナウンスでは列車の到着を知らせていたりしていました。母は私の手をしっかりと握りしめ、手を離さないようにと私に言いました。離さない、離さない、と私は繰り返し自分に言いました。私はアメリカ出身、つまり外国出身です。ナイキの靴と穴あきジーンズ、そしてきれいなブラウスを着ていました。周りの人たちは危険です。なんの躊躇もなく私から盗むでしょう。私は、自分の後ろにいる何百人という人たちから押されるのにうんざりしていました。靴紐がほどけたとき、しゃがんで結び直しました。見上げると、母が近くにいないことに気づきました。心臓がドキドキして、背負っていたリュックサックが重くのしかかり、群衆の中の人々の顔がぼやけていきました。涙があふれ、迷子になり、押されて、膝をついてしまいました。無関心に横を通り過ぎる人たちの渦に飲み込まれ、私はちっぽけな存在でした。

青い“サリー”を来た女性が下を見てしゃがんで、私に手を貸そうとしてくれました。私は「彼女を信用してはだめ」という言葉が無意識に頭をよぎりました。彼女は危険な人かも知れないと思いました。

その女性は「ベタ（お嬢ちゃん）、大丈夫？」と声をかけてくれました。

話すことを内心拒んでいるにもかかわらず、私は声が震え始め、すべてを打ち明けるにはどうしたら良いのか言葉にできませんでした。

「私、私、道に迷ってしまったの。お母さんがどこかにいるの。でも見つからないの！」

その女性は、私がどこにいくつもりなのか尋ね、母の元に連れて行ってくれると言ってくれました。私は母のことを精一杯伝えました。彼女の目が輝いた時、私は彼女が何かに気づいたのが分かりました。私たちは人々の迷路の中を進み、私はやっと母を見つけました。母も群衆の中で私を探していました。私は母に駆け寄ると、安心感で満たされました。その女性は微笑み、母は彼女に感謝を伝えました。

その日の、この怖かった出来事は、優しさや平和に対する私の誠実な思いを取り戻す声となりました。今、私は14歳の女の子ですが、この出来事は、現在一部の混乱の地で起きている何千という紛争に比べれば、取るに足らないことだと思います。しかし、虚構の世界に怯えていたか弱い子どもだった私は、新しいビジョンを描けたことに計りしれない誇りを感じています。今、私は悲慘なことが起きる世界で生きていますが、それらは回避することができるのです。ティーンエイジャーの私は、日々ソーシャルメディアを使い、他の人たちが共有する問題や世界で起きている危機を目にします。当たり前のことですが、メッセージは一瞬に拡散されるのだと気づきました。もし一瞬で拡散されるなら、親切な行為を通じて見知らぬ人たちを助けるためにメッセージを送り、認識を拡散し、支援を得ることができます。

COVID-19のパンデミック中に、私は世界中の農村の地域でわずか数日の間に膨大な数の人々が大きな打撃を受けていることを知りました。そのため、このような資源不足の地域に酸素濃縮器を提供するための資金調達を支援する取組みに参加しました。誇らしいことに、5万ドル以上が集まり、これにより無数の命を救うことができました。ソーシャルメディアがこのような活動を促進するためのプラットフォームとして機能したのです。

平和の概念は多面的で、本当に多くの世界観に分かれます。しかし、平和への道のりは優しさから始まります。それは、私が自らの経験から得た方法です。平和な世界とは、困窮している人々が住む社会に手助けにやってくる人々がいる世界だと思います。見知らぬ人を信頼できれば、この世界は私たちにとって素晴らしいものになると、私は信じています。